

# 国際交流から得たこと

## 自分の考えを、自分の言葉で表現する

富山県立大門高等学校 江守恒明教諭

### <プロジェクト以前>

前任校の志貴野高校に勤務していた時に、富山大学大学院に2年間、内地留学をしました。専攻は化学で、電気分析を学ぶために、分析機器を自作したり、計測用のプログラムを書いたりしていました。大学院で得た知識を、高校の化学計測の実験に応用していたのです。

### 実践の経過、教訓

#### ゼロからのスタート

大門高校には、平成9年度に赴任しました。100校プロジェクトが始まった頃で、学校にインターネット環境が入り、ネットワークやコンピュータを数学や理科などの教科指導にどのように活用するのが研究テーマでした。

私はそれまで、ネットワーク利用の経験が少なく、生徒のコンピュータ利用促進やネットワークの管理などに多くの戸惑いがありました。タイミングよく、大学でネットワークを専攻している卒業生が遊びに来ていたので、彼からいろいろ教わりながら、自分でも勉強していきました。とにかく稼動するレベルまではなんとかしよう、と本を何冊か読んで挑戦していったのです。当時は富山県立大学と専用線でつながり、グローバルIPを持っていたために、自校のサーバでWebとメールの運用をしなければならず、とても大変でした。現在は県全域の情報教育ネットワークが構築され、富山県総合教育センターがWebとメール、フィルタリングなどを管理・運営しており、とても楽になりました。



#### 米国から国際交流プロジェクト参加の申し入れ

9年度に着任早々、世界の高校生が環境問題を考える「国際環境サミット」に参加することになりました。当時、英語のホームページを持つ高校はまだ少なく、大門高校などわずかでした。そこで、米国から国際交流プロジェクト「国際環境サミット」への申し入れがあり、管理職の理解を得て、学校として参加することになったのです。米国オレゴン州での第1回「国際環境サミット」には、日本からは大門高校だけで、米国、オーストラリア、南アフリカ共和国など6か国が参加していました。

「国際環境サミット」は、インターネットを使ったグローバルな活動で、13年度まで2年に1度、各国持ち回りで開催されました。その間、教員だけの研修プロジェクトが隔年であり、私も米国オレゴン州で行われた教員研修に参加し、会議の進め方や各国での環境問題への取り組みなどを話し合いました。13年度には大門高校で第3回「国際環境サミット」を開催し、海外の5か国1地域から約70名の参加がありました。水グループ、ごみグループの2つに分かれ、「どうすれば地球環境を守れるか」を討論・議決し、提言文を作ることが目標でした。生徒の提言文は、富山県や各国の環境係に提出されました。最終的に、

#### バーチャル図書館

「バーチャル図書館」は、本を読まなくなった生徒たちに、読書を促し学校図書館の存在を見直してもらおうのがねらい。

ネットワークを利用した全国読書会

学校図書館の図書紹介Webページの作成

CD-ROMソフトを活用した教科学習

上記の3つの方法で実施した。は、校内で数年前から実施していたメーリングリストによる読書会を、全国63の高校に声をかけ広げたもの。その結果、全国9校が参加することになった。

<http://www.cec.or.jp/es/E-square/books/11nendo/gakko/075/075.html>

国レベルまで提言できたことは、生徒たちにとっても励みになったと思います。

### 情報を見分けられる生徒に

11年度は、Eスクエア・プロジェクトの「学校企画」として、「バーチャル図書館」を実施しました。本校でも、生徒たちが本を読まなくなった、という状況があり、1年「情報科学」の授業で、自分で本を選び、紹介文や書評を書いた図書紹介Webページの作成を行いました。そして、生徒の紹介した図書を校内のWebページに登録し、「学校図書館データベース」としてイントラネットで検索できるようにしました。また、「ネットワークを利用した全国読書会」を企画し、国立教育政策研究所・国語科の有元先生にも参加していただき、先進的



国際交流で各国の生徒と。第3回「国際環境サミット」(於：大門高校)

にITを活用している学校に呼びかけました。テーマは「いじめ」で、関連する本を選択し、メールで意見交換をします。それをもとに、各校では先生と生徒がディスカッションを行い、さらにメールで話し合いを続けました。知り合いには知られたくない、けれども、誰かに聞いてもらいたいといったこともありました。2年間で実践は終わりましたが、参加者の心に残ったプロジェクトだったと思います。

次に、普通教科「情報」としてのカリキュラム開発・教材開発と総合実習としてのプロジェクト学習に取り組みました。授業スタイルは、一方的な知識伝達形式だけでなく、生徒が自主的に活動できる形態を多く取り入れました。たとえば、実習体験：掲示板・チャットなどの体験からネットワークコミュニケーションの長所・短所を考える、討論：新聞報道の写真から情報操作について議論する、鑑賞・分析：ビデオ鑑賞やテレビCMの分析から情報を読み解く、作品制作：自作CMづくりで映像による自己表現をする、など情報を見極め、情報リテラシーを体験的に身につけることでした。情報化社会に参画するにあたり、「正しい情報を見分けられる力」をつける必要があります。そのためには、制作者としての視点を身につけることも1つの解決策だと考えたのです。映像制作は、生徒の反応も非常に良く、活発な意見や様々なアイデアが生まれ、多感な高校生の姿を見ることができました。これらの実習体験から、新聞やテレビなどの報道に流されず、自分自身の考えを持って行動できるようになって欲しいと思います。

### 「自分の意見を言えない生徒」にショック

実践の中で最も印象に残っているのは、国際環境サミットでの日本の生徒の立ち居振る舞いでした。リサーチのプレゼンテーションは、海外の先生方からも絶賛されるほどすばらしく、万全の準備で望んだ成果でした。しかし、分科会が始まると通訳がいるのにも関わらず、ほとんど発言することができませんでした。また、海外の先生から質問された時、隣を見て意味もなく、にこっと笑ったりします。「あなたに向かって話しかけているのになぜ横を向くのか」と不思議がっていました。それに対して海外の生徒は、内容に関わらず多くの発言をしました。とにかくショックでした。コミュニケーションとは何だろう、日本の生徒はなぜ発言できないのだろう、と悩みました。人に自分の思いを伝えるという、最も基本的なことが本当にできていないと痛感しました。

一人で考え、グループワーキングしながらのディスカッション、そして発表する、ということを繰り返し授業の中に取り入れ、コミュニケーション力の育成を重視したいと考えるようになりました。

## 10年間を振り返って

### 「人との出会い」がICT活用の原動力

私がICTを活用した実践を続けてこられたのは、県外の先生や研究者の方など、校種や職種を超えて人と出会え、刺激を受けることができたからです。まさに、「人との出会い」が原動力です。また、たまに予想以上のプラス評価をもらえることがあります。人に誉めてもらい、社会にも認められながら、情報教育の流れに参画できているという実感も大きな力になっています。

### <成功の秘訣>

研究会やセミナーに少しでも多く参加し、多くのヒントや最新の情報を得たことです。また、実践を自分なりにまとめ、発表する機会を得たりしながら、モチベーションを高く持ち続けたことです。